

学 位 論 文 要 旨

氏 名 山 尾 英 一

題 目 工業高校の進路指導における生徒の職業に対する自己効力感の形成要因と役割

本研究の目的は、工業高校の進路指導における適切な教育的支援の実践に向けて、工業高校生（以下、生徒）の職業に対する自己効力感の構造を把握し、その形成要因と役割を明らかにすることである。

本論文は緒論と結論を含め全10章で構成されている。第1章では、工業高校の現状及び自己効力感に関する先行研究を整理し、①近年、工業高校を卒業した後、関連する業種に就職しない生徒や職業生活を適切に営めない生徒が増えつつあること、②この問題の背景として、生徒が様々な学習経験を自己のキャリア形成と適切に結びつけられず、将来の職業生活に対する見通しや自信、展望などをもてないことを進路指導における実践課題として指摘した。その上で、生徒の職業に対する自己効力感を「工業高校生が将来の自己の職業を適切に営めそうであると感じる遂行可能性の認知」と定義し、上述した実践課題の解決に向けて、1) 生徒の職業に対する自己効力感の構造的な把握、2) 生徒の職業に対する自己効力感の形成要因の検討、3) 生徒の職業に対する自己効力感が果たす役割の検討という3つの研究課題に対処する必要があることを示した（以下、研究課題1～3）。これらの研究課題に対し本研究では、第2章から第10章において、以下のように対処した。

研究課題1に対しては、まず第2章において生徒の職業に対する自己効力感を因子分析的に把握した。その結果、生徒の職業に対する自己効力感が、①職務や職場などの社会的環境に適応するために必要とされる基礎的な資質を形成したことによってもたらされる効力感である「適応資質効力感因子」、②特定の産業分野に関連する領域固有性の高い専門的な知識や技能・資格などを修得したことによってもたらされる効力感である「専門性効力感因子」の2因子（以下、職業自己効力感構成因子群）により構成されていることを明らかにした。第3章では、得られた職業自己効力感構成因子群の進路指導上の妥当性を検討するために、企業が新規入職者に求める基礎的・汎用的能力及び社会人基礎力の形成期待との関連性を検討した。企業の人事担当者を対象とした調査の結果、関連・非関連業種共に、工業高校生の職業自己効力感構成因子群への形成期待の高い人事担当者の方が、基礎的・汎用的能力、社会人基礎力への形成期待も高く、これらを進路指導において高めることの重要性が確認された。

次に、研究課題2に対しては、第4～5章において工業高校生の職業に対する自己効力感の形成要因を検討した。第4章では、職業自己効力感構成因子群とキャリア成熟との関連性を検討した。その結果、1学年ではキャリア関心性が、2学年ではキャリア計画性が、3学年ではキャリア自律性が、

「適応資質効力感因子」の形成に寄与していることを明らかにした。しかし、「専門性効力感因子」は、2学年においてキャリア計画性からの影響を受けるものの、1・3学年では有意な影響力は認められなかった。第5章では、3学年進級時(5月)の生徒を対象に、自己概念形成が職業自己効力感構成因子群に及ぼす影響について検討した。その結果、「自律志向性」が「専門性効力感因子」の形成度に、「社会的価値志向性」が「適応資質効力感因子」の形成度に影響するなど、両者の関連性が把握された。しかし、「キャリア志向性」、「自己モニタ志向性」については、その影響力は弱く、進路指導啓発期の段階では、生徒の自己像に基づくキャリアへの展望が将来の職業に対する自信と適切に結びつけられていない傾向が課題として把握された。

研究課題3に対しては、第6章から第7章において、生徒の進路実現に果たす職業自己効力感構成因子群の役割について検討した。第6章では、過去・現在・未来という時間的な連続性の中での将来展望の形成との関わりに着目し、1～3学年の生徒を対象に時間的展望体験との関連性を検討した。その結果、時間的展望の形成に対しては、すべての学年において「適応資質効力感因子」が広範な影響力を有していることが明らかとなった。しかし、「専門性効力感因子」は2学年でのみ影響力が認められたものの、進路実現に直面する3学年においてその影響力が消失することに課題が見られた。第7章では、進路実現のプロセスにおける不決断状況との関わりに着目し、3学年を対象に進路不決断に及ぼす影響を縦断的(5, 7, 10, 2月)に検討した。その結果、「職業決定不安」、「職業障害不安」、「職業情報不足」などの進路不決断状態の回避には、職業自己効力感構成因子群の水準の高さが重要な役割を果たすことが明らかとなった。

以上の結果を踏まえ第8, 9章では、0市内公立A工業高校の具体的な進路指導の中でのアクション・リサーチを実施した。その際、これまでに得られた知見に基づき、①3学年全体を通してキャリアへの関心性、計画性、自律性の向上を図るように進路指導全体を構成し、②「専門性効力感」の因果関係が確認された2学年において関連業種の企業が求める人材像の講話を、③3学年では「キャリア自律性」や「自律志向性」など、進路実現に対する生徒の自律性を高めるために「面接模擬」や「卒業生を囲む会」などの取り組みを取り入れた。その結果、3学年の進路に対する意識が、具体的な進路を決定する10月前後に水準の低下するV字型で推移したものの、「面接模擬」や「卒業生を囲む会」などの取り組みによって「適応資質効力感因子」、「専門性効力感因子」両因子の形成を図ることができた。第9章ではさらに、卒業・就職後の職業に対する自己効力感の変容について追跡調査として質問紙調査及び半構造化面接を行った。その結果、関連業種就職群では、「適応資質効力感因子」が在籍時の水準を維持すると共に「専門性効力感因子」がさらに向上する傾向が認められた。また、非関連業種就職群では、職業自己効力感構成因子群が共に向上する傾向が認められた。しかし、「専門性効力感因子」の向上要因は群間で異なり、前者は主に工業高校在籍時に習得した専門的な知識・技能の直接的な活用経験が、後者は主に実践的な学習経験による自律性などの汎用的な職務能力を発揮した経験がそれぞれ重要な役割を果たしていた。

第10章では、各章で得られた知見を整理すると共に、生徒の職業に対する自己効力感の形成要因とその役割を踏まえた教育的支援のあり方を考察すると共に、生徒が自ら適切な進路選択を、行い自己実現を果たし得る進路指導の実践の方向性を展望した。